

# 露柱と交わる世界

小林圓照

## はじめに

露柱(ろちゅう)という言葉<sup>(1)</sup>は禅の語録に散見するが、具体的にどのようなへはしら<sup>(2)</sup>であろうか。建物のそのの露天に立てられた石柱か丸太の柱の類であろうと、一応は推察できる。しかも奇妙なことに、禅の祖師方の問答に「燈籠(とうろう)・露柱」とか、「露柱に問取(もんしゅ)せよ」などと出てくる以外、他の文献には、この語の記述が皆無に近いことである。『佩文韻府』卷三十七・下に陸游詩からの「露柱の説法、君まさに聞くべし」という出拠を挙げているが、この用法も禅語の世界を出るものではない。

無著道忠(一六五二—一七四四)の『禅林象器箋』第二類、殿堂門<sup>(3)</sup>には、直接の項目ではないが、「雨打(ゆた)」と「撐天柱」(とうてんちゅう)との説明文に露柱がある。すなわち、「およそ殿堂の四壁と露柱との間を雨打という」、「およそ殿堂の正面の左右の二露柱、これを撐天柱(へ天をささえる柱)という」となっている。元来は戸外のはだかの柱を指すのであろう。それが禅と関係のある法堂とか僧堂とかの前庭や石階の下に、何らかの目的で建てた屋外の柱を意味するようになる。そして、次第に仏殿や法堂などにある壁面にはつながらぬ、独立した柱を呼ぶように

変化したものだろうか。日本の資料だが、『正法眼蔵』第二十九、「山水経」<sup>(4)</sup>では、「さらに宮殿楼閣の欄堵（らんか）い）・露柱は、かくのごとくの説著（せつちや）あると保任することもあらむ」という表現があり、建築内のものであることを指示している。とにかく単純に仏殿などの円柱とも見なされている。

さて諸宗教のシンボルズの世界では、「柱」といえば、世界をカオスからコスモスへと変容し、その聖域空間を創造する機能を持つ世界の中心柱、宇宙山、宇宙の軸（Axis mundi）<sup>(5)</sup>を想起するが、禅の露柱はむしろ、この概念には概当しない。また大乘経典において、宗教文学的な象徴表現に見られる壮麗な世界での、例えば、「大重楼閣が瑠璃をもって柱とし、明浄宝でもって荘嚴されている」といった宝柱（Ratna-yūpa）のイメージも露柱には相応しい。それとは逆に、露柱は瓦礫、牆壁、燈籠、火爐、鉢盂、匙筋、拄杖、扇子、門扇、厨庫、仏殿、三門といった、日常に触れるものと共に、無情（非情・無生物のもの、植物を含めて言う場合がある）の最も手近に存在する物象の代表として、禅の示衆や商量に登場してくるのである。

七月一日の解夏の上堂で、  
 比較的、素朴で標準となる露柱の用例を大応国師（南浦紹明一二三五—一三〇九）の語録から取り上げてみよう。

暑、退いて涼生じ、樹凋んで葉落ち、

林下の衲僧、全機、独脱す。

露柱・燈籠、箇箇に心空し、

狸奴（りぬ）・白牯（びやくこ）いちいちに眼活す。<sup>(7)</sup>

会中に自覚を得た叢林の僧たちは清涼の眼で世界を眺める。非情の露柱にも燈籠にも、ひとつひとつ心を空しくし、猫や牛にも目を輝かす。非情ながら生き生きと「見られる露柱」がそこにある。

元旦の上堂で、

昨夜、旧年を送り、今朝、新歳を迎う。

太宰府裏の藤三、源四、崇福山中の露柱・燈籠、拜する底は拜し、賀する底は賀す。

いちいち、わが家の真機を漏泄し、

頭頭、靈山の密旨を發揮し、

山僧も、一半の氣力を省得す。<sup>(8)</sup>

新年を迎え、崇福寺の露柱や燈籠までが、年賀のあいさつを交している。非情のものが有情の者ともども拈華の禪風を挙揚してくれているといった風景がある。

冬至の上堂で、

一氣潜かに通じて万物敷榮し、暖(だん)烘烘(こうこう)、開(どう)洪洪(どう)たり。

露柱・燈籠、満面に光生じ、

狸奴・白牯、ともに歎顔を展ぶ。

直に得たり、崇福山中の和氣熏春、

仏法、世法、一時に昌盛なることを。

何をもって験となす。良久して云く、

「露」

一陽來復して万物が活氣を回復した。凡も聖も、無情(露柱・燈籠)も有情(猫牛も人々も)も春を迎える歎喜にかがやいている。「露」へまる出しだの一句は大応の、雲門禪師(文偃、八六四―九四九)を通じての真面目をここに垣間見ることが出来る。そのほか、燈節の上堂、結夏の小參などに、無情を代表する露柱として、同工の提示が見られる。

露柱という何でもない眼前の非情な存在の直下の把握を意義づけたのは、雲門である。次の露柱問答もその一つである。

雲門は露柱を指して、東京（開封）出身の僧に質問する。

「お前の郷里では、こんな柱があるかな」。僧が答える、「あります」。雲門が問う、「どういう名で呼ぶか」。僧が言う、「もちろん、露柱と言っています」。雲門は更にたずねる、「寒村の爺さんにも、そう呼んで通じるかな」と。僧は返答できぬ。雲門が代って言っている、「本領の面目だ」と。

〔雲門語録〕

露柱は無情の物の代表なるがために、かえって情識を絶したものの、あるいはその情況を導き出す道具となる。加えて、澄んだ眼で真実を見て取る証人であり、ついには、本来、不動なるが故に、かえって凡聖の跡も残さぬ無心な行動主体にさえなり得るといふ高度な象徴性を帯びてくる。この小論では以上のような「露柱」を媒体とする問答その他の種々な姿を、異なった祖師、商量の場面、提示の意図、その背景などの状況を検討しつつ、そこに展開する禅の世界の意義を考察して行きたいと思う。

### 一 臨濟録などに出る露柱

露柱という語の意味はどうあれ、禅録に登場してくるのは馬祖門下以前にさかのぼることはない。『伝燈録』第七にある廬山、帰宗寺の智常禪師（馬祖の法嗣）の次に挙げる問答が古い例に属するのではなからうか。

僧問う、此の事、久遠なり、如何が用心せん。師（帰宗）云く、牛皮、露柱を鞞（おお）うに、露柱は啾啾（しゅうしゅう）と叫ぶ。凡耳は聴くとも聞えず、諸聖は呵呵（かか）と笑う。

久遠の此の事とは仰山慧寂禪師（八〇七―八八三）が長沙景岑禪師（一八六八）に「人人すべて這箇（しゃこ）の

事あり、ただ用不得。」(伝燈録卷十)といった、法華経に背景をもつ一大事を指すのであろうが、帰宗はとくに取り立てて、その「用心」を拒絶する。ここでの露柱は声をあげてなげく、単なる柱の喩に過ぎない。

さて『臨濟録』では、露柱の用語は二回あり、比較的初期の用例に属する。

(1) 一般の好悪を識らざる禿奴(とくぬ)あって、すなわち東を指し、西を画し、晴を好み、雨を好み、燈籠・露柱を好む。你、看よ。眉毛幾茎かある。「這箇、機縁を具す」と、学人会せずしてすなわち心狂す。かくの如きの流、総にこれ野狐の精魅魍魎(せいみもうりよう)、他の好学人に噬噬(あくあく)として、微笑して「瞎老(かつろう)禿奴、他の天下の人を惑乱す」と言われん(示衆六一)<sup>(4)</sup>

これは邪正の判断もできないような師家に対する強烈な批判である。学人に対して肝心の所は触れないで、東と問えば西と、他の事で言いまぎらし、晴とか雨とか、山とか水とか、日常卑近なところで、いいかげんに商量する。眼の前のものは手当り次第に、燈籠だの露柱だのと問答に愛用する。充分、会得できていない学人は「これはすばらしい縁ができた」と騙されて狂喜する。こんな妖怪変化はいづれ具眼の士から、「とんでもないインチキ坊主だ」と冷笑されるであろうと。露柱の用語はないが、同趣旨の箇所は「示衆」(三二)<sup>(5)</sup>にも出てくる。当時の禅界の一面が提示されている。ここでの「露柱」は否定的な文脈状況で使用されているが「燈籠露柱」がすでにセットで成語になっていることに留意したい。

(2) 次は「勘弁」に見られる露柱の取り扱いである。

師、ちなみに軍営に入って、斎に赴むき、門首に員僚(いんりょう)を見る。師、露柱を指して問う、「是れ凡か是れ聖か」と。員僚、無語。師、露柱を打して云く、「たとい道い得るも、また祇だこれ箇の木樞(もつけつ)」「(といて)すなわち入り去る。(勘弁二十一)<sup>(6)</sup>

ここでいう露柱そのものは鎮州軍の営舎にある丸木の柱に過ぎない。いわゆる一本の木樞(棒杭の切れはし)であ

る。仮りに牛馬をつなぐ柱でもよい。ただ臨済によって「凡人か聖者か」とゆびさされ、あるいは杖で打たれた時、有情・無情の世界から解放されて、面目を新たにする。この問答は臨済の自問自答であり、しょせんは独り芝居に終る。この状況では、無衣の真人である臨済には、てくのぼうと化した員僚（幕僚の将校）よりは無心で赤裸な露柱の方がより親密で、気心が通じる。ここに露柱という存在の不思議がある。

外、聖凡を取らず、内、根本に住せずと、つねに説法している臨済であるから、「凡か聖か」のテーマは「示衆」に十二分に主張されていることである。真正の見解を弁得すれば、真・俗、凡・聖、染・浄の世界を透脱して、表顕の名字に執することはない。心地の法を把得すれば自在に、能く凡に入り、聖に入り、俗に入り得る。また、勘弁では、普化の風顛な行動を、臨済の同輩たちがより集って「彼は聖者か凡夫か」と批評しているとき、闖入して来た普化によって逆評価される事件があったが、これも「凡聖」の問題からこの話頭とかかわっている。

まつとうな問答が成立しない、いうならば非生産的な商量だと知りつつも、勢い込んで「仕掛」ざるを得ないという状況はもともと普化和尚一流のものであった。さてこのケースでは、いつも同伴して赴齋していた普化の姿はなく、臨済一人である。

この勘弁にもっとも類似した状況だと、想起させられるのは、普化と馬歩使（馬・歩両軍の指揮官）との問答である。市中で馬歩使に出会うと、普化は相撲をとうとうと仕掛ける。馬歩使は普化に五棒をくらわせる。普化が言う、「らしいことはらしいが、そうかといえは、そうではない」と。馬歩使の毆打はしょせん覚醒の打ではない。普化が空振り承知で、命がけの擬似禅問答に身をさらすところに、彼の「狂」がある。ここでも普化の「聖か凡かを」詰問する意味で、露柱の位置に、普化を置いてもよい。もっと徹底した見方をするならば、臨済自身の座に普化をすえれば、ぴったりする。裏がえしていえば、臨済に内在する普化こそが、この問答を誘発したと読みとれるからである。

臨済が「何とって答え得ても、木の切れはしに過ぎぬ」と言ったのは、露柱にことよせて員僚を評した意味に相違

ないが、その時、員僚は木樞となり、露柱は普化のごとき親友となる。この両者の入れかわりこそ、臨済が有情にも無情にも、出入自在の活動ができることを証明するものである。知覚、情識を絶した、無分別の存在こそ最も親しいものである。

一休はこの露柱を「目前の真の木樞」と呼んで、「傀儡」（かいらい）という頌（おほ）をうたっている。道元禪師も「祖師西来意」の巻に、「露柱にあらざば、木樞（ぼくくろち）といふべからず。仏面・祖面の破顔なりとも、自己他己の相見あやまらざるべし（おほ）」と解説している。

## 二 露柱に問取せよ

露柱は人ではない。しかも禪にあっては、無情の露柱は自から問いかけることなくして、常に面前で応答を迫まらされている存在でもある。場合によっては、一人前に拄杖の一打が飛んでくるのである。以上のような「問取露柱」〈露柱に尋ねてみよ〉を指示する例には、次のような好話頭がある。

(1) 長沙興国寺の振朗禪師、はじめて石頭に参じて問う、「いかなるか、是れ祖師西来の意」、石頭云く「露柱に問取せよ」、（振朗）云く、「振朗、会せず」。石頭云く「われ更に会せず」と。師、俄然として省悟す。〔伝燈録巻十四（おほ）〕

『祖堂集』巻四と『伝燈録』巻十四の石頭章にも同話が載っている。しかし振朗の省悟の部分はない。露柱は学人の「問取」に耐えうる存在であり、情識を絶したものとして、かならず「問取」に即応して「道得」できる。「わたしにもっと分らぬ」という石頭の語は「お前が不会というのがわからぬ」という理解では浅いようだ。不会に徹する方向であろう。会・不会は越えられねばならない。

(2) 僧問う、「いかなるか是れ仏」、師（宣州棹樹慧省禪師）云く、「猫兒、露柱に上る」、云く、「学人会せず」、師

云く「露柱に問取し去れ」。〔伝燈録卷十四〕<sup>四</sup>

露柱に上った猫には聞かないところ、「露柱に問取せよ」という応答はすでに「露柱」が一定の意義を含んでいることを示している。そして後代、この句は「西来意」などと同様に問答の素材となり、概念化されて行く。

(3) 鼓山智嚴了覚大師（鼓山第二世住）にも次の商量がある。

多言また多語、由来、返って相誤る。珍重。僧問う、石門の句は即ち敢えて問わず、請う師方便せよ。師云く、露柱に問取せよ。〔伝燈録卷二十一〕<sup>四</sup>

多言、多語にわたらぬ方便とは、知覚・知解を越えた無情の露柱が一番よく為人の機用をはたしてくれることを意味する。なお石門の句とは、後出するが、石門山二世の「露柱に燈籠を掛く」という一句であろうか。

(4) 泉州西明院の琛禪師の問答に、問う、如何なるか是れ祖師西来の意、師云く、露柱に問取し看よ。〔伝燈録卷二十二〕<sup>四</sup> ここではほとんど定形化した露柱問答となっている。

(5) 時代はこれより少しさかのぼるが、黄檗希運禪師の法嗣である陳尊宿に次の問答がある。すでに相手不足の商量において無情の露柱が「打たれる」ケースは前述したが、ここでは「掴まれる」。

一日、天使ありて問う。三門ともに開く、那門より入らん。師喚ぶ、「尚書」と。天使、応諾す。師云く、「信の門より入れ」と。天使また、壁画を見て問うて云く、二尊者、何事をか対譚す。師、露柱を掴んで云う、三身中、那箇か法を説かざる。〔伝燈録卷十二〕<sup>四</sup>

信門より入れというのは、「信は道元、功德の母」とか「信をもって能入となす」などの教学的な背景があり、勅使としての存在も、信を運ぶものである。陳尊宿はもともと露柱ではなく、勅使を掴んでいる、いや掴めるべきであった。問取露柱、以前の行動がここに見られる。ここでは露柱は法身、報身、応身の三身中の法身か、あるいは三尊者の中のどれでもよいがその一つにさせられてしまった。陳尊宿の問いかけは、法を説かず、サボっているのは誰か、

露柱よ、お前かという勢いであるが、果して他の二身（二尊者）が真実、法を問いているのであろうか。この問答は、後述の「露柱説法」のテーゼを導き出す好例ともなっている。なおその他、『雲門語録』には、露柱を一掴して云う場合とか、喫粥を終った僧に「露柱を咬著せしや」と問うなど、これに類した多様な問答が展開されている。

(6)次に雪峰義存の法嗣の保福展禪師の露柱問答をみてみよう。

師、一僧を見てすなわち杖子をもって、露柱を打つ。またその僧の頭を打つ。僧、忍痛の声をなす。師曰く、那箇か、什麼（なん）として痛せざる。僧、対うるなし。〔伝燈録卷十九〕

ここでは情識を絶して、不痛である露柱と、忍痛の声を出す有情としての僧との間に評価の逆転がある。また「露柱を打つ」ケースと徳山和尚の打棒との関連が考えられるが、一応この小論では触れない。

(7)『祖堂集』第十一、あるいは『雲門語録』に「柱に問取する」ケースの代表的な提示がある。

師（雲門）ちなみに杖を把って柱を打って問う、什摩の処より来る、対えて云く、西天より来る。師云く、什摩としてか来る。対えて云く、唐土の衆生を教化し来る。師云く、わが唐土の衆生を欺かん、却って大衆に問う、還って会すや、対えて云く、会せず、師、柱を打して云く、你今の両重の敗鬪を打せん。〔祖堂集第十二〕

これは「柱」を媒体とした雲門の自問自答より始まる。まず指摘して置きたいことは、『雲門語録』の方は一喝があつてのち「わが唐土の人を欺かん」と言っていることと、『祖堂集』では、『雲門語録』に「露柱」である所が単に「柱」となっていることで、露柱の語義の上からも留意しておきたい。さて雲門の一打で、「柱」はダルマ大士と化し、そのダルマは衆生を欺す存在だと退けられる。次に大衆に問いかけるが、大衆は応答できない。ついに「柱」はダルマ大士と大衆との両方の罪を被って「二度と失敗したぞ」と打ちすえられる。

有情はもちろんのこと無情であろうが、あらゆる存在が真を道得へ言い得る、表現できるゝするならば、どこまでもそれに問取へ尋ねてみるゝして迫って行く道がここにある。

(8) 道元禪師の道得(どうて)の巻は、これらの祖師方の説く、道得と問取との水脈を深くくみ取っているように思われる。その巻の冒頭をあげると、

諸仏諸祖は道得なり。このゆゑに、仏祖の仏祖を選ずるには、かならず道得也未と問取するなり。この問取、ころにても問取す、身にても問取す。拄杖弘子にても問取す、露柱燈籠にても問取するなり。仏祖にあらざれば問取なし、道得なし。そのところなきが故に」〔正法眼蔵第三十三、道得〕<sup>60)</sup>

また「仏性の巻」にも「仏性成仏のとき無仏性なるか、仏性発心のとき無仏性なるかと問取すべし、道取すべし。露柱をしても問取せしむべし、露柱にも問取すべし、仏性をしても問取せしむべし」とある。<sup>61)</sup>

### 三 証明者としての露柱

無情の代表者、露柱は「見られる露柱」、「打たれる露柱」にとどまらない。澄んだ不動の眼で、ありのままを見て取る証人となる。

(1) 龐居士と仰山との対話は、この「露柱証明」の典型である。

(龐) 居士、仰山禪師を訪い、問う、「久しく仰山を嚮(した) いしに、到り来たればなにゆえに、かえて覆(うつむく)や」。山、弘子を竖起す。士曰く、「あたかも是(しか)り」。山曰く「これ仰(あおむ)くや、これ覆(うつむく)や」。士すなわち、露柱を打って(または拍って)曰く「人なしと雖然(いえども)、また(わがために)露柱の証明せんことを要めん」。山、弘子をなげうって曰く、「もし諸方に到らば、ひとえに拳似するに任す」。<sup>62)</sup>〔龐居士語録上〕

「仰山(上)に向いた山」と聞いてかねてから拝見したいと願って参りましたが、なんとうつ伏せですね」と龐居士は仕掛ける。「仰(あおむ)くと覆(うつむく)」にこだわった仰山は自己確定の提示のために弘子を立てざるを得な

かった。居士は有無を言わず、第三者である「露柱」を証人にした。雲門の一打の「実印」と、弘子を放り出して江湖に判定を一任することにした仰山の「認め印」との両印が押されて「露柱」という証明書ができあがったともいえる。

この問答は『仰山語録』（五家語録所収の仰山章、中文出版本、二十七左、一一六b）や『龐居士詩』巻下、（二一、中文本二四〇、下）にも出てくる。居士詩の方は白雲守端禪師の偈が附されている。語録の仰山章では隠静岑禪師の偈がある。この問答の「仰山」を瀉山下の仰山慧寂（八〇七—八八三）とすれば時代が相応しないので別人であるか、あるいは後代の創作問答とも推定できる。隠静岑禪師の評言では、「大小の小釈迦（仰山慧寂のこと）、居士の一拶をうけて、直に手忙脚乱を得たり。ただ居士、露柱を打ちて、一下するもまた作麼生。鯨は海水を呑み尽して、珊瑚の枝を露出す」といっている。

(2) 露柱の証明をめぐって興味ある用法が、『大応録』に見られる。まず仏涅槃上堂のところに、

僧問う、「雨淡紅を洗って桃萼嫩く、風浅く碧を動かして柳糸軽し」と。如何なるかこれ瞿曇の面目。師（大応）云く、「慈顔すでに露る」、僧云く、「如何せん、露柱の横に點頭するを」、師云く「まさに請えり、人の証明するなからんと。」

先人の初春の風景に寄せて、学人は仏涅槃の真面目を問う、師は釈尊の慈顔はすでに現前に露出しているではないかと問いかえす。学人は「しかし、露柱がかぶりを横にふって納得していませんよ」と反論する。だれも証明する者がいないと思っていたら、露柱がそこにいたかと。是非については彼（露柱）に一任しようと大応が言う所は、先の仰山禪師の立場に通じるが、この場合は「証明」に積極的・肯定的である。

(3) 同趣の商量を挙げると、

上堂、僧問う、「一機一境、ことごとく、今時に落つ。化門に涉らず、如何が信を通せんや」。師云く、「南地の竹、

北地の木」。僧云く、「露柱、暗中に横に点頭す、響（にい）。師云く、「更に知音の在るあり」。

現在の一機一境にすべてが集約されます。ここで教化の門を開いてくれねばどうして本源に到達できましようという僧の願いに対して、「南は竹、北は木」と個々それぞれの本分があると答える。僧は反論する。「露柱が闇の中で、否、否とかぶりを横に振っていますよ」と。大応は答える「わしをよく面識する知人がそこにいたか」。露柱は大応の知音底として目前にあって、否でも応でも、ちゃんと見とどけてくれている。ここは前話と全く同じ文脈である。以上の如く非情な露柱は証人として、あるいは不動の知己として、多くの法戦の現場に臨んでいるのである。

#### 四 露柱をめぐる無情との交流

露柱は無情・非情の手近な代表として禅録に登場するが、その無心なるが故に、共に無情の世界に生きる瓦礫、牆壁、燈籠、火爐、鉢盂、匙筋、拄杖、門扇、厨庫、仏殿、三門らと自在に交流する。凡聖を越えて、執われのない行動主体とさえなり得る。道元が「三十七品菩提分法」で「念覺支」へ心が明らかで忘却しない覺は「露柱、空を歩みて行くなり」と称したような空に基礎を置く自在な活動が展開する。この種の表現は雲門の語録に圧倒的に多い。

(1) 青原の七世で翠巖参禅師の法嗣である福州の安国院の従貴禅師の問答には次の如くである。

問う、牛頭未だ四祖を見ざる時如何。師云く、香鎮、繩牀に對す。僧云く、見て後ち如何、師曰く、門扇、露柱に對す。〔伝燈録卷二十二〕

(2) 益州大随法真禅師にとっては、露柱は法を付嘱する相手でもあり得る。

問う、和尚、百年ののち、法を何人に付せん。師曰く、露柱、火爐、曰くかえて受くるや、師曰く、火爐、露柱。  
 (3) 露柱と燈籠とは最も親密である。そして無情の代表としても同格である。露柱燈籠、燈籠露柱は一語を成している。

石門山乾明寺慧徹禪師の問答に、

問う、従上の諸聖、什麼の処に向つて去る。師云く、露柱、燈籠を掛く。〔伝燈録卷二十三〕<sup>83)</sup>

諸聖に去来はない。これは現成を指摘する問答であろう。瑞鹿先禪師には「南泉遷化しづくの処に向つて去る。東家に驢となり、西家に馬となる」〔伝燈録卷二十六〕<sup>84)</sup>に對していろいろな理解を例示する所に、「露柱と作る処に去る」というのを挙げてゐる。当時、この種の応答が一範例となつていたものであろう。

(4)大応国師の七月一日の上堂にも「灯籠、露柱に掛く」の語がある。すなわち、

只だ自恣、斯に臨み、法堂新たに開くが如きんば、かえつて新底の仏法ありや、師云く「燈籠、露柱に掛く」<sup>85)</sup>

元来、真法は現成底である。燈籠は露柱にもとから掛つてゐる。別に目新しい見解を探しまわることもない。

(5)問答によつては露柱としても、燈籠に置き換えても支障のない場面が多い。例えば仰山と滄山の問答もそうである。

仰山問う、如何なるか是れ祖師西来の意、師、燈籠を指して云く、大好、燈籠、仰山云く、ただ、これすなわち是なることなきや。師云く這箇はこれなんぞ、仰山云く、大好燈籠、師云く、果然として不見。<sup>86)</sup>

「西来意」を仰山に問われて滄山が燈籠を指して立派なものだなあという。仰山は燈籠に氣をとられて「祖師意」はこれですねと念を押そうとする。滄山は這箇へこれゝって何だと反問する。仰山は美事な燈籠にひっかかつて、固定化、概念化して、真実を把握していないと分る。

第二章の冒頭で例示した如く、石頭と長沙との問答で、石頭は西来意を問われて露柱に問取せよと答えた。また『雪峰語録』巻上にも、雪峰は、僧に触目菩提へ目に触れるものは一切が悟りの座ととは問われて「好箇の露柱」と応答している。これらの情況から、無情の代表という限りでは燈籠と露柱とは同置できる。

(6)この滄山の「大好燈籠」の話頭に係わつて、雲門の次の問答も注目すべきであらう。

師、僧に問う。還つて燈籠を見るや、僧云く更（ことさら）に見るべからず。師云く、獼猴を露柱に繋ぐ。<sup>64</sup>

この話は大燈国師の七月一日の上堂にも見える。ここでは雲門が超仏越祖の談に対して「餠餅」と評した話を挙げ、その端的を問う僧に、大燈が「獼猴、露柱に繋ぐ」と答えているのである。

「露柱」に仏教学的な背景を見ることは不可能であろう。例えば「露柱また光を放つ」といった語句があるから大乘仏典の宝柱などと類比が可能と思われるが、もともと意味はない。『大事』第一卷<sup>65</sup> Mahāvastu の四九三の仏名のうち第三一八番目に宝柱 (Rama-yūpa) というのがあるが、露柱に結びつける根拠はない。yūpa とはもともと動物をつなぐ祭柱であったり、戦勝を祝う記念柱であったりする。

いっぽう、露柱の相方である「燈籠」の方はその起源を『毘奈耶雜事』(卷十三)に発する。コーサラ国の都、舎衛城(シユラーヴァステイ)でのこと、夜の誦経に出くわす蛇などの動物を避けるために、仏陀の指示で灯火を燃すことになったが、今度は火に虫が飛び込むので、竹籠をつくり、それに薄畳か雲母片をはって造ったという伝説がある。それによれば燈籠は仏陀時代から僧たちの誦経を守護して、名実ともに法灯を保持した存在だといえなくもない。雲門が「中に一宝の形山(肉体)に秘在するあり」という示衆で燈籠を持ち出すのも燈籠のもつイメージとその背景にかかっていることであろう。「未完」

〔以下の第五・六・七章は小論では紙面の関係で掲載を割愛する。ただ問題点のみ例挙して置く。〕

## 五 無情仏性・触目菩提と露柱

禪における無情仏性、草木成仏の思想と実践との展開上に「触目菩提」のテーゼにもとづき、その代表としての露柱をみて行く。特に、(1)無情の中でも、なぜ「露柱」なのか、(2)体露真常や独露身の伝統に導かれた、雲門の「露」の思想との関連に注目する。

## 六 無情と露柱説法

無情仏性の思想の背景と長沙、雲門などの提示にもとづいて考察する。無情説法の線上に「露柱の説法・聞法」、  
「露柱は一大藏経」とする問答などに関連する素材をとり扱う。

## 七 古仏たちと交わる露柱

仏陀から始まり、ダルマ大士、夾山らの古仏祖が露柱と同視されること、露柱懐胎児の問題、さいごに雲門の示衆の「古仏と露柱と相交る」ということへの展開を見る。

## 結 語

この小論では露柱をめぐる展開する話頭を中心に概括的に考察した訳であるが、なお各論的に見わたせば、雲門、道元、大燈と花園帝、一休などの各禅師については、それぞれの禅風に深くかかわり、その表詮の趣向するところに独自のものがある。個々について論究するに足る、特色ある素材は充分、そなわっているので別に検討する機会を持つべきであろう。

## 注

- (1) 『仮名正法眼蔵』では露柱(ろしゅ)と呼んでいる。例  
 えば「仏祖の証契する女は露柱燈籠(ろしゅとうろう)なり」(第四十二、説心説性、十八頁)
- (2) 『佩文韻府』卷三十七、二十一—三九九七上、『陸游集』  
 第二冊、中華書局出版、劍南詩稿卷二十八、七六二頁、
- (3) 殿堂(十七頁)
- (4) 「山水経」(『正法眼蔵』第二十九、日本思想大系13)三
- 「拄杖歌」道人四壁空無有。一柱清香閑袖手。床辺独有拄  
 杖子。疾病相扶真我友。禅房按膝秋聽雨。野店敲門暮餘酒。  
 畏途九折歷欲尽。世上誰如君耐久。老矣更踏千山云。何可  
 一日無此君。歸來燈前夜欲半。露柱説法君応聞。

- 三八頁)
- (5) 『ヒーローデ著作集(13)』宗教と芸術五九頁、XIV. Le Symbolisme Cosmique Monuments Religieux, Center du Monde, Temples, Maison; Mircea Eliade 63. SOR.
- (6) 六十華嚴、(大正藏九、六七七上、)大莊嚴重閣の師子奮迅三昧中の様子。「瑠璃以柱、以明淨室而莊嚴之」(入法界品)。
- (7) 「崇福禪寺語録」(『日本の禪語録三』、二四六頁参照)
- (8) 「崇福禪寺語録」(同右、三一〇頁参照)
- (9) 「崇福禪寺語録」(同右二八三頁参照)
- (10) 『雲門語録』(九五左、二〇四頁上b、中文本)『五家語録』内。
- (11) 『景德伝燈録』第七(台湾本二二九頁)
- (12) 『示衆六十一』(一〇六一—〇七頁)『訓註臨濟録』柳田本]
- (13) 示衆三十二(五二頁、柳田本)
- (14) 勘弁百一(一七五頁、同右)
- (15) 勘弁九十六(一七〇頁、同右)
- (16) 『祖堂集』卷十六中文本(二〇七c)
- (17) 日本思想大系本(6)二九六頁
- (18) 「祖師西來意」第六十二・二〇四頁)
- (19) 卷十四、(七十六頁、台湾本)
- (20) 卷十四、(八十六頁、同右)
- (21) 卷二十一、(二十一頁、同右)
- (22) 卷二十一、(三十四頁、同右)
- (23) 卷二十一、(二十六頁、同右)
- (24) 『雲門語録』九十五(二〇四頁上a)前出本。
- (25) 卷十九、(一八〇頁)
- (26) 『雲門語録』八十三(一九八頁上a)『祖堂集』第十一(七三a)
- (27) 「道得」(三八四頁)
- (28) 「仏性」(五十二頁)
- (29) 『龐居士語録』(禪の語録(一)六九—一七〇)参照
- (30) 『仰山語録』(五家語録内)(二十七左、一一六頁b)
- (31) 「崇福禪寺語録」(前出本二二五—二二六頁)
- (32) 「崇福禪寺語録」(前出本二二九—二三〇頁)
- (33) 「三十七品菩提分法」(第六十卷・一八九頁)
- (34) 卷二十一(二十七頁)
- (35) 卷二十三(六十五頁)
- (36) 卷二十六(一四二頁)
- (37) 「崇福禪寺語録」(二四四頁)
- (38) 「滄山語録」(五左、百五頁)
- (39) 卷二十三、(六十五頁)。「大徳寺語録」(『日本の禪語録』六、一七八頁)
- (40) E. Senart: "La mahāvastu" vol.I.I.140
- (41) 大正藏二十四・二六三a b